

うたしなむぎ通信

<第2号>

炭鉱の娯楽特集号

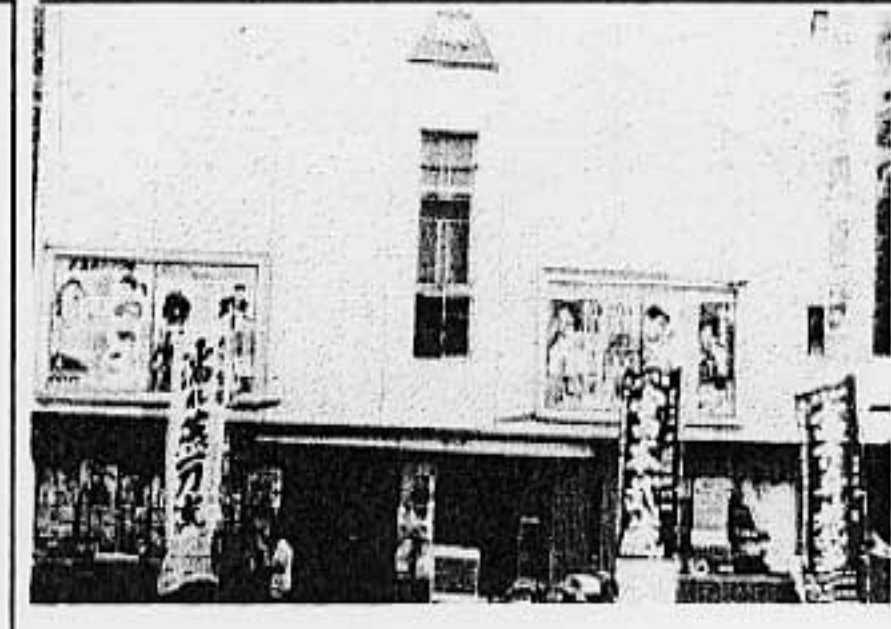
発行：うたしな炭鉱の記憶再生塾
発行日：平成13年3月24日

映画は娯楽の王様だ

昭和30年代後半まで、最大の娯楽は映画だった。千恵蔵や右太衛門、坂妻のチャンバラや「駅馬車」など、西部劇の客入りも良かったが、一番は、「君の名は(S28)」。三百人以上入る炭鉱会館が立ち見でびっしりになり観客は食い入るように見入っていた。



歌志内東映劇場 (昭和13~37年頃)
S33 歌志内東映劇場(写真提供)



歌志内東映劇場 (昭和13~39年)
S33 歌志内東映劇場(写真提供)

再び映画が始まる。新品と一ヶ月後を見比べると場面のつながりが?なことも。封切り直後の映画がすぐかきり、岡春夫や東海林太郎などの有名歌手も公演にやってくるなど、炭鉱会社の力がものすごかった。

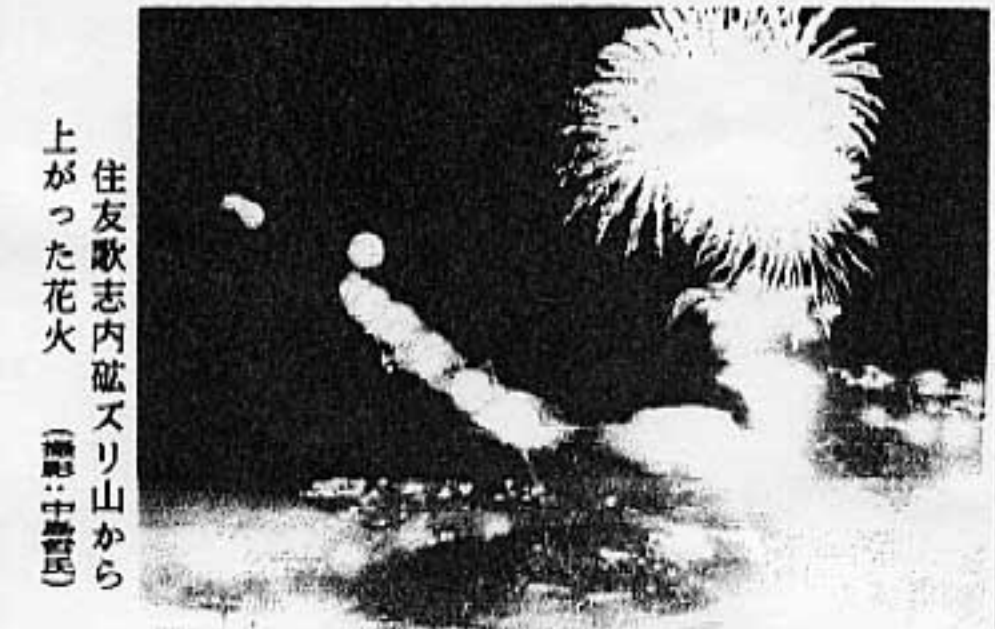
公演料は野菜?

復興のため石炭増産が叫ばれた昭和22、24年、食糧事情は好転せず、野菜が不足した。そこで考えたのが娯楽の少ない農村に楽団が慰問にまわることだった。



空知組の音楽サークルが活躍していた。当時、各楽団の名演奏は「現物」を稼ぎ出し、組合の配給部長はそれをみんなに分配することができた。

花の大輪に咲くヤマ



住友歌志内炭ズリ山から上がった花火 (撮影：中野啓)



炭住長屋から突き出た「背高」アンテナ (東光地区)
S30年代普及期は、遠くの局の電波を受けた (写真提供：炭鉱博物館)

昭和30年頃からは、テレビが普及し始めた。長屋の間がアンテナが林立。中には、肝心のテレビは高いので後回しの家も。外からわからないのはいとこころ。

アンテナあると「テレビ」



(写真提供：中野啓)

先にもテレビがついた家には、大人も子どもも集まった。せまい部屋が、まるで映画館のようにびっしりになり、玄関は靴だらけになった。

「月光仮面」やプロレスにみんなが夢中になっていた。

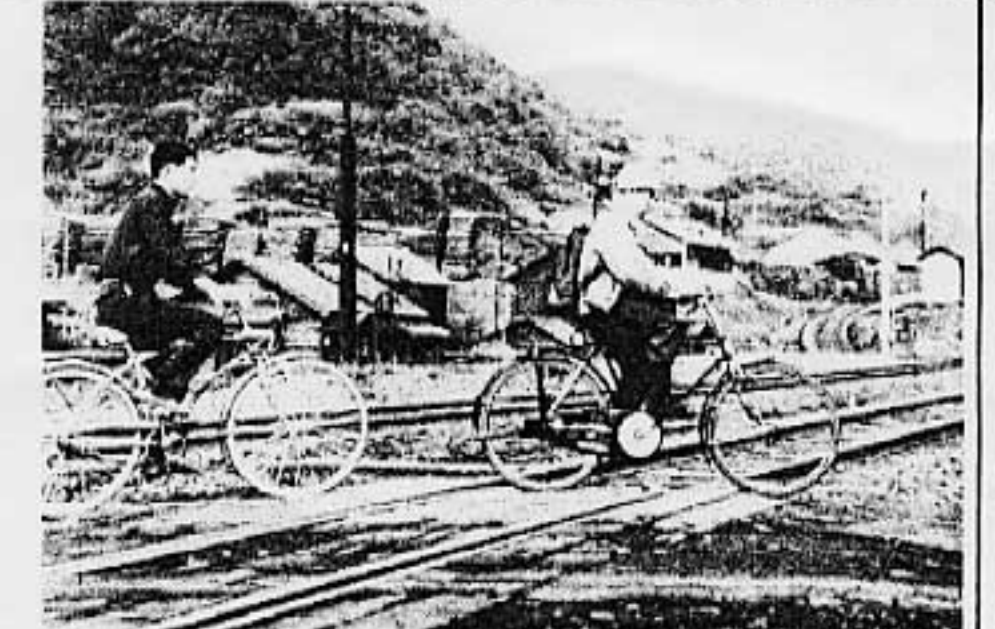


(写真提供：中野啓)

かあさんの手料理
自慢の「ナンゴ」は天下一品
あかぎれ大丈夫かい?
(写真提供：中野啓)

マイカー通勤

昭和34年、住友歌志内炭そばの「二元町」が、斜坑を作るため移転し、できたのが「新元町」。



西歌の踏切を渡る自転車 (昭和30年代)
(写真提供：中野啓)

炭鉱で働く人には配炭があったが、粉炭や沈粉ばかりで火が着かない。そこでカナヅチを持ちズリ山に。岩石とくっついた塊炭を砕いて持ち帰り、たきつけ用にした。中にはそれを売って小遣い稼ぎをする人も。

ズリ山で石炭拾い



空知炭鉱のズリ山 (昭和10年代頃)
自然発火し、薄い煙が上がるズリ山もあった (写真提供：炭鉱博物館)

みんなで遊ぼうよ!

昭和30年頃、炭住街の広場にジャングルジムなどの遊具が置かれるようになり子どもは大喜び。



遊具で遊ぶ子どもたち (昭和30年代・東光地区)
炭鉱会社が福利厚生のため遊具を設置した (写真提供：炭鉱博物館)

炭鉱こぼればなし

昭和28年頃の話。ある日、仲間の家で法事になったので、友人一同「ネクタイ」をした。こまに正座していたが、一向に始まる気配がなし。どうして坊さんが遅れているんだと聞くと、当の本人は涼しい顔、すり切れ座布団に蓋を置き、反対側には裏返しした洗面器を出してきた。一同「ヤラレ」と思ったが、法事だからと、そのまま座っていると、やおら釜をゴーン。驚いて飛び上がるやうな音。お経らしきものをモグモグいいながら、もった香典を「かみ」にして、子どもに「おい、配給所に行って焼酎買ってこい」といつもの宴会が始まった。

その二 食料
戦後しばらくは食糧事情が良くなかった。どこもひよこを育てて食料にしていた。さき料理しようとしたら大暴れ。おやじさんの服から顔から血で真っ赤に染まり、近所ではけんかかど動いて大騒ぎになった。

知り合いの飯場の所に行く、鍋がクツクツいいていよいよ。その飯場長が「食べていくかい」というのでよこした。しかし、その若い衆が小さな声で「やめとけ、やめとけ」。いぶかしんでいると、「そのムシロの下見てみる」という。それをみると、猫の上半身が...

平成12年度 うたしな炭鉱の記憶再生塾
今野啓子、中山道徳、高橋博明、山本勇、佐久間隆雄、今野光雄、佐久間隆子、百井英樹、石井吉二郎、田中隆雄
手作り製本ゆめつむぎ(昔新聞複製) 税入500円